

2016 アジア選手権報告書

参加団体名：NTT 東日本

氏 名：佐々野大輝

種目：M8+

1. レースの展開、結果、反省点
2. 国際大会を経験して良かったこと、困ったこと、今後のボート人生にどのように影響するか。

<Preliminary>

2 レーン中国、3 レーン日本、4 レーンカザフスタン。中国はアップ中からコックス・漕手ともに叫んでいて気合い充分。スタート練習は硬そうに見えた。カザフスタンはダブルエントリーで、コックスは女性。こちらを挑発しているのか、指笛を吹いたり歌を歌ったりしている。そんな雰囲気の中、トップボールをスタートシステムにつけスタート。

エネルギーが漲り、パワー発揮できている。やや硬いがいいスパートに入っていく。中国からリードを奪いながら、この遠征で課題としてきたコンスタントへの移行。少し早めに入り、思いのほかよく切り替えられる。よし！この時点でカザフスタンは視界から消える。落ち着きすぎたか、加速・SR とともに落ちてくる。400m で1-2 シートのリード。長めのアタックを入れるも差は開かず。もう少しリードを広げたいところで2Qに入る。

中国は変わらないスピードでじりじりと迫って来る。加速の鈍り・有効レンジの短さも出てきて抜かれ、アタックを入れても思うようにスピードに乗れず1艇身のビハインドで3Qへ。

少し硬いリズムを変えられず、差を縮められないうが、中国も思うようにスピードを伸ばせていない。

1500m、早めのスパートをしかけ1-2シート縮めた。漕手の視界にも入ってきてバウ方向から声を

上げている。中国も必死に逃げ切りモードに入りつめきれない。1750m、再びスピードを上げて猛追するも前半の硬さと中盤のリズムが災いしたかいつものキレが出せない。中国ゴールのブザーがはっきり聞こえる中スパートし続けてゴールした。

カザフスタンはコックスが女性であるため、”Didn't start”の記録となった。中国 5:52.32、日本 5:56.32、カザフスタン DNS。風は弱めの逆風であった。Final まで1日練習できる。もう一度メンバー全員で建設的に高め合っていく。

<Final>

1 レーンカザフスタン、2 レーン中国、3 レーン日本。Preliminary レース後の代表者会議で女性コックスが認められた。Preliminary レースの夕食時に尋ねてみたところ、カザフスタンの2000m エルゴのスコアは6:10-6:20程度で、クルー内ではばらつきがあるようだ。強敵中国は、筆談によるとストロークペアが30・27歳、ミドルフォアは20歳前後、バウペアは22・23歳という比較的若いクルーを28歳のコックスがまとめる構成だ。身長は180cm前後の我々に対し、みな190cm前後か。前日から中国国歌しか聞いていない。なんとしても日本チームに金メダルをもたらしたい！「勝って歴史を作ろう」という監督の力強い言葉をもらい、岸を蹴る。

レースアップも後半、スタート練習に入るタイミングで7番手のクラッチCワッシャーが抜け落

ちていることに気づく。審判に事情を説明し、10分発艇を遅らせる措置をとっていただいた。自転車伴走をしていたコーチにお願いしワッシャーを持ってきてもらい、事なきを得た。手短にスタート練習を実施し発艇台へ向かう。

Preliminary レース同様、スタートからリード。反省を活かし、はっきりとコンスタントのペースに移行するというよりも鋭さをキープして自然に移行していく。ここからはクルーで確認した通り、自分たちがトップであり続けるためのレースを展開し続けるだけだ！が、我々よりも中国が上手く対応してきたか、迫ってくるのが早い。**Preliminary** レースではリードしていた500mで、今度はキャンパス差ほどのビハインド。その後も力の差を見せつけられるように2Qでリードを広げられ、3Qではほぼスピードが変わらず離されないものの、詰められない。4Qのスパートでも艇差は変わらずゴール。

中国 5:59.26、日本 6:03.63、カザフスタン 6:29.48。風は**Preliminary** レースの時よりも少し強い逆風であった。エイトのレースでは前半1000mでリードを奪ったポジションにつけていることが勝つうえで重要であると考えているが、**Final** でも表現することができず、ほぼ同じ艇差で敗れてしまった。

<国際大会の経験について>

- ・リギングや岸付けなども含め、世界基準に触れられる。今回はトップポールをはめ込み艇を固定するスタートシステムを経験できた。
- ・日本にいただけでは得られない生の情報を得られるし、日本のロウイングを客観視できる。
- ・アウェーと借艇への適応という環境要因により、クルーの破壊と再構築を短期間で行える。
- ・目標を再設定するいい機会になる（世界との差をどう縮めるか考える選手も、これだけやってダメなら厳しいな、と考える選手もいるだろう）。
- ・日本チームとしての団結と、高校生から社会人まで混在することでお互いに発見がある。

・料理が1週間ほとんど変わらない（食べなれている中華料理でよかった）。

・ホテル-コース間の移動がバスで約45分と長く、便にも限りがある（選択肢がないので不平不満は出ない）。

・ホテルは基本的に快適で、英語のできるスタッフも何人かいた。

・世界選手権やオリンピックを目指すうえで、ある程度出場回数が必要だとすると、いい機会である。同時に、中国という強国、素晴らしいライバルにチャレンジし続けることで、世界選手権やオリンピックが視野に入ってくるのではないかと。

・「日本代表」というかたちは学校や会社に対して、ボート部にとって優位に働くであろうし、個人にとっても自信になり得る。

・アジア選手権は日本として、アジア・世界に対して意思を示す機会となる。例えば、LM4-をオリンピック種目からの削除反対の立場をとっていることを示すために、毎年派遣し続ける。

・国内大会に留まりがちな日本ボートファンや、日本スポーツ界全体に対し、アピールし日本代表のボートを盛り上げるきっかけとしてもアジア選手権は利用できる。例えば、日本ボート協会の公式Webページで情報発信できるし、「アジアで〇位」という結果は分かりやすくメディア受けするのではないかと。

簡単ではありますが、レースの振り返りと所感を述べさせていただきました。最後に、この度の遠征派遣にご尽力くださったスタッフのみならず、そのサポートにより、私たちに不自由なくレースをさせてくださった団長の市来様に感謝申し上げます。ありがとうございました。